



戦争体験「語り継ぎ手の会」が結成されました！

9月23日(土・祝)、ピースあいち戦争体験「語り継ぎ手の会」結成のつどいが、1階交流の広場で行われました。参加者は、沖縄県、島根県、和歌山県など遠方からもあり、83名に及びました。

この会は、2009年以来活動してきた「語り手の会」の皆さまが高齢化して、いずれは活動が難しくなることを想定し、戦争体験を次世代が「語り継ぐ」ことができるよう、準備することを目的とします。つどいでは、会則を決めて、代表に中村桂子さんを選び、活動の内容につき意見交換を行いました。

また、特別プログラムとして「4世代を超えて祖母の戦争体験を語り継ぐ」三矢紀子さん一家のお話、腹話術による柳川たづ江さんの「父の沖縄戦を語り継ぐ」の披露があり、語り継ぎへの想い、方法、在り方にはいろいろあることを学びました。

これからは、「ピースあいち」の事務局スタッフが段



「語り継ぎ手の会」結成のつどい

取りして、これらの活動を展開していくことになります。

この戦争体験の“語り”(伝承活動)は、「ピースあいち」にとって、資料展示とならぶ大切な活動の柱であり、皆さまのご協力を得ながら、育てていきたいと思えます。



朝鮮半島からの引揚げ体験を語る三矢紀子さん

腹話術で父の沖縄戦を語り継ぐ柳川たづ江さん

椋山女学園高校放送部が取材に来てくれました。

第5回寄贈品展 戦争を語り継ぐモノたち

12月8日(金)～2018年1月18日(木)

「ピースあいち」ではこれまで10年以上にわたって、市民の皆さま方から戦争と平和にかかわる資料の寄贈をいただいています。寄贈資料は約2,400点となりました。寄贈品展は寄贈された資料の公開を目的としていて、5回目を迎えます。

今回の寄贈品展では、2015年10月から2017年5月までに66人の方から寄贈された資料約420点を、軍隊生活、国民生活、本・地図、写真・郵便・新聞、その他に分類して展示します。



展示品から

寄贈者の家族や親戚が戦地で使っていた軍装品や衣服等があります。また、研究資料や仕事・趣味のために集めていた本やポスターの展示もあります。沖縄の資料館からの寄贈もあります。

展示のタイトルは、「戦争を語り継ぐモノたち」。モノが発するものから、戦争の時代と、その時代に生きていた人たちのことを、感じ取っていただければ幸いです。

10年間の経験を活かした企画展

「いわさきちひろ展—世界中のこどもみんなに平和としあわせを—

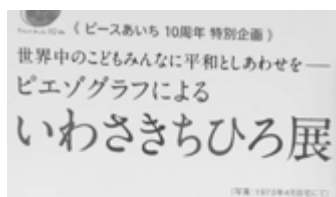
7月18日(火)～8月31日(木)

開館10周年のメイン企画展『いわさきちひろ展』は、連日予想を上回る来場者でたいへん賑わいました。ちひろの雑誌や絵本が出版された当時から親しんできたというシルバー世代や、ちひろの絵が見たくて初めて「ピースあいち」へ来たという方も多かったようです。絵本を何冊も並べた読書コーナーでは、低いベンチに座り、絵本を手にとってしばし過ごす人たちの姿が途絶えませんでした。

アンケートで「戦争や悲惨さを直接に表現して平和を訴えるのではないけれど、子どもたちを平和の中に置きたいと願う気持ちが自然と自分の中に湧いてくるのに気付く」という感想をいただきました。

ちひろの長男松本猛さんの講演会(7/23)「母いわさきちひろを語る」では、ちひろが自分の戦争体験をベトナム戦争下の子どもたちに重ねた絵本『戦火のなかの子どもたち』制作のエピソードをうかがいました。それらすべての作品に込められていたのは、子どもを豊かな愛情の中で育てたい、自分の味わった戦争と苦難を、二度と子どもたちに降りかからせてはいけないという愛と平和への願いでした。

ドキュメンタリー映画『いわさきちひろ27歳の旅立ち』は2回上映とも満席。ちひろ作品の紙芝居『人魚ひめ』『王さまのながぐつ』『雪の女王』は、「ピースあいち朗読サークル」が上演しました。どちらも、ちひろ



ろをより深く知る催しでした。

来場者総数は約3,700人。最終日には2007年の開館以来の来館者累計7万人を達成しましたが、そうした実績だけでなく安曇野ちひろ美術館と連携した展示作りや、大好評だった書籍グッズ販売でのボランティア同士の協力など、「ピースあいち」が積み上げてきた10年間の経験が活かされたのも嬉しいことでした。

好評だったアーティストトーク

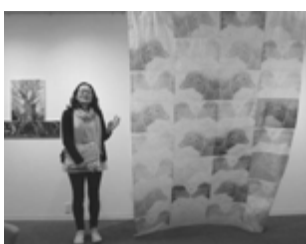
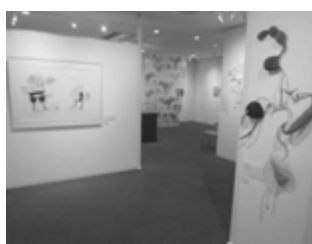
「peace nine 2017 巡回展」

9月5日(火)～23日(土)

この巡回展は、名古屋芸術大学の学生、先生、大学外部作家らによる、憲法9条や平和をテーマにした美術展(peace nine実行委員会主催)です。表現者として、個人が感じ考える「平和」への想いを発信しています。2007年5月から毎年開催され、今年で11回目。「ピースあいち」での展示は2012年から。今年は

18組(19名)の出品者が集いました。

9月9日には、出品者による「アーティストトーク」が行われました。「平和は享受するものではなく、自分たちでつくるものだ」と語る作家。作品づくりを通して平和について深く考えたという学生、表現者として社会に貢献できる作品を作り続けようと決意したという学生…。学生さんたちの言葉は熱く正直で真剣で、なかには涙ぐんで話せなくなってしまう人もいました。作品の背景や表現の意図がよくわかり、とても好評でした。



「戦争の中の子どもたち」展

2018年1月24日(水)～2月17日(土)

「ピースあいち」では子どもたちの来館が多い2学期から3学期にかけて、子どものための企画展を開催しています。今年は、岐阜県鵜沼国民学校5年女子組の生徒が1944(昭和19)年に国民学校の日常と行事を色彩鮮やかに描いた絵22枚を展示しています。

1941年に当時の尋常小学校が国民学校へと変わり、そのころから学校教育は子どもたちを戦争へと駆り立てる役割を果たしていくようになりました。学校の行事でも当然のことながら、成人国民と同じような意識を持つように指導されてきました。絵を見ると、その様子がよく分かります。

「兵隊送り」や「御英霊お迎え」では、大人と同じように日の丸の小旗を振っています。「団栗拾い」や「稲ご取」、「桑の皮むき」などでは、子どもたちが、食糧確保と並んで、軍需品に使用される燃料や繊維製品の材料確保の一端を担っていたことが分かります。神社参拝や毎月八日の大詔奉戴日^{たいしやうほうたいび}の行事は戦時体制への強化となっていました。

今年はほかにもう一つ、沖縄慰霊の日追悼式(2017年6月23日)で沖縄の高校生が朗読した「平和の詩」も展示しています。沖縄戦の体験を聞いた高校生が、



岐阜県鵜沼国民学校5年女子組生徒の絵

「尊い命のバトン」を引き継ぎ、世界を平和にするために行動することを誓うと心強く訴えています。

※対米開戦の日(1941年12月8日)にちなんだ実施された国民運動。国旗掲揚、君が代吹奏、宮城遥拝、詔勅・勅語の奉読、御真影の奉拝などが行われた。

杉山千佐子追悼―「名古屋空襲と戦傷者たち」展

2018年2月27日(火)～5月19日(土)

名古屋空襲によって戦災傷者となった杉山千佐子さんは2016年9月18日にこの世を去りました。1945年3月25日名古屋の街に250キロの爆弾が降り注いだこの日、自宅近くの防空壕に入っていた杉山さんは爆弾によって左目を大きくえぐり取られました。当時は「防空法」によって「逃げるな、火を消せ」と避難は許されず、その結果、多くの犠牲者と負傷者が出ました。

1952年「戦傷病者戦没者遺族等援護法」が制定され、戦没者、戦傷病者に弔慰金・給付金が支給されましたが、軍人・軍属に限定されました。「内地は戦場ではなかった」「国との雇用関係がなかった」という理由で、同じ日の空襲で被害に遭っても一般市民は救済されませんでした。敗戦国ドイツでは軍人と市民を差別することなく救済が行われています。

杉山さんは戦争下で命を奪われ傷ついた人々の無念を晴らすべく全国戦災傷者連絡会を立ち上げ、生涯をかけて一般民間戦災犠牲者に対する援護法の立法化を訴え続けました。それが平和運動につながると信じていたからです。

今回は、杉山さんの人生をとおして、米軍の無差別



杉山千佐子さん



民間戦災被害者の碑
(名古屋市千種公園内)



爆弾の痕跡を残す名古屋陸軍造兵廠千種製造所の外壁(名古屋市千種公園内)



参謀本部作成の地図

爆撃の実態、その下での「防空法」の問題、一般民間戦災犠牲者の救済に対する国の姿勢などに焦点を当てます。

夏の戦争体験語りシリーズ 2017

恒例の夏の「戦争体験語りシリーズ」。今年は8月1日(火)から15日(火)まで、「ピースあいち語り手の会」の方たち12人が日替わりで語り、延べ702人の来場者が熱心に聞いてくださいました。語り手のお話を「ピースあいち」のボランティアが要約しました。

(語り手の年齢は開催時のもの)

8月1日(火)

空襲と疎開

今村 實さん(84歳)

小学6年生だった1944年、名古屋市北区から母親の出身地である安城市へ疎開した。12月には東南海地震、翌45年1月には三河地震を経験した。三河地震では、祖母が家の下敷きになって亡くなった。私はつぶれた家の中から助け出された。家がなくなり、中学生になって北区へ戻ったが、名古屋城が焼失した5月の名古屋大空襲に遭い、焼夷弾の雨の中を姉弟の手を引いて逃げた。神さまがくれた命。この経験を後世に伝えていきたい。



8月2日(水)

ゾウ列車に乗って 萩原 量吉さん(76歳)

私は小学校3年生の1949年、三重県の津から東山動物園に遠足に来て、戦争を生き抜いた象に乗せてもらい、象の背中に生えている硬い毛で尻がひどく痛かったのを覚えている。戦災で猛獣が檻から放たれることを恐れ、殺処分されていった状況のなか、この象を命がけで守り抜いた人たちの勇気と努力に感謝し、戦争はいやだという思いを強くした。



日本はいま再び軍備の増強中であるが、予算は平和のために、戦争・テロをなくすために使うこと、ゾウの背中を体験した者として、平和を守り続けることを願う。

8月3日(木)

シベリア抑留

河村 廣康さん(93歳)

21歳で入隊。翌22歳から24歳(1945年10月～1947年5月)までシベリアに抑留された。バイカル湖西の収容所で材木を伐採し、鉄道敷設に従事した。冬は-20度、極寒は-60度を越え、食糧は不足、薬もない中で多くの若者が亡くなっていった。今、テレビで大食い競争やケーキや玉子をぶつける映像を見ると腹が立ち、情けなくなる。この一切れでもいい、食べさせてやりたかった。「腹一杯食って死にたいな」と言って死んでいった戦友を見てきたのだ。お前たちがつくってくれた平和で生きている。お前たちの遺骨はまだシベリアから帰ってきていない。墓がどこにあるかも分からない。私は骨皮になっても帰ってきた。オレは生きていていいのかなと思う。



8月5日(土)

疎開体験

松原 実智子さん(84歳)

名古屋市東区に曾祖母、両親、弟の5人家族で生活していた。戦争が激しくなり、小6の時、祖母がいた足助に縁故疎開した。縁故のない同級生たちは近郊のお寺に集団疎開をした。ある日、東区の実家に帰ったら母は居らず、父方の親戚がある瀬戸まで20数キロを一人で歩き夜中にたどり着いたことが忘れられない。高等女学校は豊田市の寄宿舍から通ったが、蚤との闘いであった。終戦の日、校庭に集められ玉音放送を聞いたが、よく分からなかった。校長先生が泣いていたのは覚えている。その後、母と父が相次いで亡くなり、私の戦後は長く続いた。小学生の頃から本を朗読するのが好きだったのが、俳優への道に進むきっかけだった。



8月6日(日)

ひろしま原爆

石原 隆さん(90歳)

8月6日、20歳の時、学徒動員で広島^の東洋工業(現マツダ)へ行き被爆した。爆心地から5kmほどの工場の寮で横になっていると、突然、閃光と轟音。窓ガラスが爆風で全部吹っ飛んだ。



頭の上では、白い雲、光る雲が動いていた。何が起きたのか全く分からなかった。寮の治療室には、手を前に出し皮膚が垂れている人たち、横になっている人にはハエがたかっている…。なすすべもなかった。戦争は本当にむごく辛いものだ。どんなことも鵜呑みにしないで、自分で考えて判断してほしい。そう願っている。

8月8日(火)

旧満州・奉天市の生活体験

松下 哲子さん(83歳)

奉天(現瀋陽)で生まれ、昭和16年に小学校入学。平壤^{ピョンヤン}に疎開し終戦、奉天に戻った。1945年8月の奉天は、国境を越えて攻めてきたソ連兵が多勢いて、銃で撃たれた日本人が道に転がっており、国境付近から逃げてきた年寄りや子どもたちが力尽きて路上で死んでいた。死体を見るのが特別なことではない日々だった。今も消息不明の人たちがいる。奉天から1カ月かけて日本に帰ってきた。栄養失調のため、おできをつくって！「名前のある人間として生を終えられるようでなければいけない」と思っている。

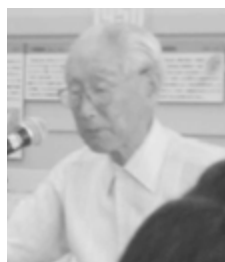


8月9日(水)

空襲と学徒動員

加藤 照さん(86歳)

1945年、中学に入学してすぐ工場労働が始まる。空襲が激しく、部品が集まらないため仕事がなく、一同不満が募って近所のお寺に立てこもったこともあった。4月には日清紡績で飛行機の鉤打ち作業に従事。作業は簡単だったが、きつかった。農家の子だけが持ってきたお米の弁当が紛失する事件も起きた。7月、岡崎空襲で我が家は全焼。8月15日敗戦。仲良しの友達がその日満員の通学列車から落ちて亡くなった。ただ茫然として15日が過ぎていった。以降70余年。平和であることはありがたい。



8月10日(木)

軍隊生活

中野 巖さん(89歳)

16歳で志願して海軍予科練習生となった。軍隊では、なぜ自分が殴られているのか理由も分からないまま、毎日毎日殴られた。理不尽な命令でも、命令は絶対服従。人間らしさを奪い、人間を一つの型にはめ込むためだ。人間らしい心を持っていたのでは、敵の兵を殺すには抵抗がある。人を平気で殺せるようにする。それが軍隊だ。今の憲法は「人権尊重」を謳うが、当時は人権など全くなかった。今の憲法は大事にしていかなければなりません。



日中市民 非暴力をめざすつどい

10月15日(日)

東海地域外国人サポートセンター〈通称、希望〉のご協力と名古屋市立大学の平田雅己さんにご尽力いただき開催しました(参加者28名)。

名古屋市には2万人を超える中国人が住み、経済・文化面では関係が深まる一方で日中関係は冷え込んでいます。中国残留孤児二世で「希望」の元代表の木下貴雄さんから、戦争で翻弄され犠牲を強いられた一族のお話、今は来日する外国人をサポート

トする側に立つての活動がうかがいました。その後、「希望」の葛冬梅さん、呉華一さんから、日中戦争をどのように教えられているか、日本社会をどう見ているかなどが報告され、フロアからも切れ目なく発言があり、時間が不足するほどの活況でした。「本来、市民同士は敵対するものではなく、話し合えば仲良くなれる」ことを確かめあえた交流会になりました。



8月11日(金)

熱田空襲体験

中野 見夫さん(78歳)

昭和20年6月、B29の空襲を受け、生死の中を生き抜いた。6歳だった。育ったお寺の境内は遺体の安置所に、本堂は生死をさまよう負傷者で一杯になった。眠るように死んだ母親の横に、上半身を失った赤ちゃんが置かれていた。きっと、おんぶされた子どもに焼夷弾が直撃したのだろう。子どもながらに悲惨さを深く感じた。戦後、学校で教わる中身がガラッと変わったよと姉たちが話してくれたが、怖い兵隊あがりの先生もいた。進学した近くの高校では、運動場整備のため、3年間、釘拾いをした。人間が戦争を始めるなら、人間がやめさせられる。僧侶として不殺生を唱える立場からも強く思う。



8月12日(土)

軍隊生活

田邊 登志夫さん(89歳)

軍隊の裏の姿を知ってほしい。当時、男の子は軍隊に入ることが一つの憧れだった。私も軍隊に入ることになり、15歳10か月で海軍に入隊し、3カ月間の新兵教育を受けた。そこで受ける制裁は、特に厳しかった。上官の命令には絶対服従で、理不尽なことも受け入れなければならなかった。その後、普通科整備術練習生を終え、鹿児島県の国分航空隊へ派遣された。特攻隊を送り出すときに特に辛く、「これでいいのか」と常に自問していた。皆さんには私の体験から、今の自分にできることを考えてほしいと思います。



8月13日(日)

満蒙開拓者の戦前から戦後

平田 和香さん(76歳)

国策「満蒙開拓」は、15年間で27万人以上の人を送り出し、日本が支配できる国をつくろうとしたものだ。当時のキャッチフレーズは、満州へ行けば「一人20町歩の地主になれる」「王道楽土だ」というもの。しかし、実際は北緯47度の極寒の地で、88%は中国人から奪ったも同然の土地である。敗戦時にはソ連兵が攻め込み、中国人からも襲われることになった。関東軍はいち早く逃走し、開拓団や居留民は置き去りにされ、言語に絶する苦難の逃避行を続けた。そのうえ、帰国しても戻っていく土地はなかったのだ。



8月15日(火)

勤労働員・空襲体験 望月 菊枝さん(87歳)

1944年高等女学校2年の頃は学業停止で、飛行機の部品をつくる工場で作業をしていた。毎日毎日、機銃掃射を受け逃げ回っていた。危険ということで工場が学校の校庭に移転。大地震を2度も体験したが、被害状況は一切知らされなかった。ある日、空襲で防空壕に逃げた。さらなる警報の後、壕が潰れ、目の前に5mほどの大きな穴が開いた。あちこちにちぎれた手や足、そして人が倒れていた。その時42名の同級生の命が失われた。恐怖とか悲しみの感じはなく、頭が真っ白となり記憶がなくなっていた。先生方の残された記録を見て、一つずつ記憶を呼びさましている。二度と戦争はいやです。



15歳の語り継ぐ戦争

「金城学院中学生の壁新聞」

7月18日(火)～8月31日(木) 2階プチギャラリー

広島への修学旅行で見た・聞いた戦争体験を一人ひとりの生徒が壁新聞にまとめました。今回は、「同じものを見て同じことを聞いていても、各自の思うこと、感じるものが違っているのが『編集後記』からもわかる」と、編集後記だけのものも、いくつか展示されました。



シリーズ 平和を守る仲間たち①

平和のための戦争展・守山

「平和のための戦争展・守山」は、その開催を主な目的として発足した「平和の会・守山」の呼びかけで、1995年から毎年、実行委員会を結成して開催しています。

実行委員会には、『戦争の過ちを繰り返すことなく、平和憲法を精神を受け継ぎ、日本と世界の人々が平和で豊かな暮らしができる社会であってほしい』と思う人ならだれでも個人として自由に参加できます。自分ができることに関わり、“楽しく”を大事に、毎年多くの人たちの様々な支えが結集して22年も続いてきました。しおりへの名刺広告、協賛金、カンパなどで運営しています。

展示は、市民から寄せられた戦争遺品や資料、平和団体提供の資料、実行委員会作製のものなど、過去から現在まで多岐にわたります。また、戦争の実相を知るために“語り部・語り継ぎ部”から生の声を聴くこと、平和な社会をつなげていくために参考になるような講演、平和であればこそできる文化イベントなど盛りだくさんの3日間です。



スタッフの高齢化や若い人たちへの伝達などに悩みながらも、毎年寄せられる「戦争について考えることができた」「もっと多くの人に見たり聴いたりしてほしい」「大変でも続けてほしい」などのアンケートの声に励まされています。

(実行委員会事務局 伊藤泰子)

ボランティアの窓

過去を忘れてはならない

古田 敬二

12月8日からの「戦争を語り継ぐモノたち」展の準備をしています。市民から寄贈された生活用品や、文書、書籍、戦地で使われた用品等々、戦前から戦後に至るまでの「モノ」たちを展示します。



悪名高い「特高」の活動の報告書など戦争を進める側の文書、遠く、戦地で我が子の死を知らされ、わが子への悲痛な思いを詠んだ父親の短歌、戦地の状況を克明に記した「戦史」など実に貴重な「モノ」たち。戦争に正しい戦争はありませんと語りかける「モノ」たち。

ドイツの元大統領ワイツゼッカーの名言「過去に目を閉ざす者は現在に対しても盲目になる。非人間的行為を心に刻もうとしないものは、また同じ危険に陥るのだ」を肝に銘じて準備をしています。

私に貢献できること

乳井 公子

小学生の頃より戦争に強い関心を持ち始め、本を読むなどして知識を増やしていましたが、何かをするということもなく過ごしてきました。そんな私が、新聞で「ピースあいち」ボランティア募集の文字



を見つけ、私にも何か貢献できることはあるだろうかと応募したことが、関わりの始まりでした。

当初は当番だけでしたが、徐々に企画展への参加、イベントの司会といろいろな経験をさせていただくようになりました。緊張のあまり、書きあげた原稿通りに進行させるのがやっとだったつたない司会も、最近ではようやく気持ちに余裕が出て楽しんでできるようになりました。さまざまな立場、幅広い年齢層の方たちとの出会いに刺激を受けつつ、これからも楽しく活動していきたいと思います。

資料館探訪 20

多くの日本人が訪れる南京事件の記念館

今年は南京アトロシティーズ(虐殺・レイプ・掠奪・暴行という全ての無法行為を指す)が起きて80年目である。南京にそれを記録した「侵華日軍南京大屠殺遇難同胞記念館」がある。屠殺の屠にはもちろん「人を殺すという意味」もあるが、むしろ動物を殺して、肉をばらすという意味が強い。「中国人は動物のように殺された」という意味が込められている。

記念館の文字の横にひときわ大きく「遇難者300000」という文字が書かれている。30万人(諸説ある)が殺されたという意味である。

入口を入ると広場があり、そこに

様々なモニュメントがおかれている。「縄でつながれて引かれていく人々」「子どもを探す母親の像」「犠牲者の数だけ敷き詰められた石」等々である。

記念館の中は、人骨がそのまま展示されている万人坑遺趾、虐殺場面の写真、安全地区で避難民を救ったラーベ(ドイツ人)やマギー(アメリカ人)などの写真、日本の新聞、南京事件が報道された新聞などの資料が展示されている。

記念館の出口の庭には、日本人が謝罪と慰霊で捧げた碑が並んでいる。(N)



月一回の発行で「ピースあいち」の活動がタイムリーにわかる「ピースあいち・メールマガジン(無料)」。「ピースあいち」のホームページからお申し込みください!

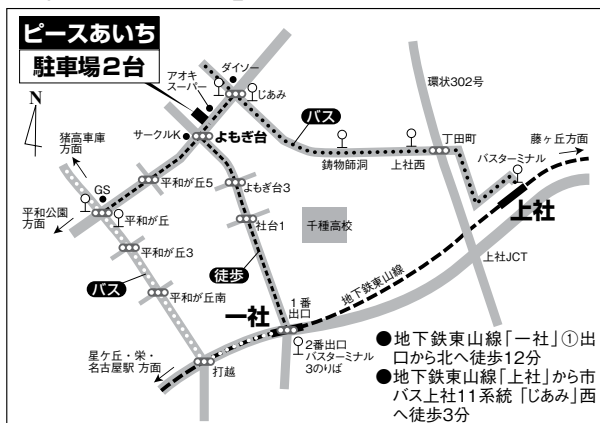
ぜひ「ピースあいち」の会員に!

「ピースあいち」は今年、2017年5月の開館10周年記念式典を皮切りに、特別企画「ピースあいち10年の歩み」展、記念誌の発行、記念募金、意見募集、特別企画「いわさきちひろ展」などを実施してきました。

「ピースあいち」の基本財源は、入館料(大人300円・子ども100円)と会員の皆さんの年会費(正会員6000円・賛助会員3000円)です。来館者数は、開館した2007年は約12,000人、以後は6,000人前後で推移してきました。

現在会員数は915名(正会員360名・賛助会員555名)ですが、「ピースあいち」の年間経費約1,250万円には大きく足りません。不足分は不確定な寄付金や助成金に頼っているのが現状です。自主財源の確立は、まず会員の拡大です。ぜひ多くの方に会員になっていただき「ピースあいち」を支えてくださいますよう、お願い申し上げます。

「ピースあいち」への交通のご案内



【ピースあいちの利用案内】

- 開館日 火曜日～土曜日
- 開館時間 午前11時～午後4時
- 休館日 日曜日・月曜日・12月26日～2018年1月4日
- 入館料 大人 300円 小中高生 100円
- 常設展示「愛知県下の空襲」「戦争の全体像・15年戦争」「戦時下の暮らし」「現代の戦争と平和」、準常設展示「戦争と動物たち」「戦争と子どもたち」。ほかに、図書や戦争体験DVDのライブラリーもあります。
- 学校や団体の見学で、展示ガイドや体験談を希望される場合は、事前にご相談下さい。
- 駐車場は2台分あります(300円)。他に障がい者用が1台分あります(無料)。

●編集後記●

先の総選挙後、希望の党の小池百合子代表は「完敗です」と語った。マスメディアは「排除」の一言がマイナスに働いたと評した。この「排除」を手元の辞書で引くと、「邪魔なものを押しのけて取り除くこと」とある。そして、民進党の議員が希望の党に雪崩れ込んだ二日後に「改憲」と「安保法制」賛成の者に限ると踏み絵を踏ませたのだ。民進党の議員のなかには「しまった」と思っている人が居るかもしれない。

この「ピースあいちニュース」でも、見出しをはじめ言葉遣いに十分な気配りが必要だと思った次第である。この点で、このたびの寄贈品展のタイトルがいい。「戦争を語り継ぐモノたち」である。(S)